

混乱の原因は？

佐藤 克 廣

鋭角鈍角の執筆に今回はかなり手間取ってしまった。原因は、新型コロナ騒動にある。ウイルスそのものではなく（騒動）である。不謹慎と思われるかもしれない。この（騒動）で使われる数々のコトバで私の稚拙な脳内が混乱していると了解できて、一気にキーに指が躍った。

「正しく恐れましょう」。そもそも「恐れ」は、正体がわからないから発生する。オバケは正体がわからないから怖い。「正しい」や「誤っている」は、その内容を理解している時に使われる。この言い回しは、「理解している」と「理解していない」という相反する方向を指示している。これを組み合わせて使われると、私の脳は悲鳴をあげる。「黒いものは白と言いましょう」と言われているのと同じである。

もちろん、「〇〇恐怖症」と言われるものには、理解しているか否かに関係なく「怖いものは怖い」と感じてしまうものがある。例えば、高所恐怖症と言われるものがある。ハンググライダーで気持ちよく空を飛ぶ人たちは、高所恐怖症ではないだろう。かたや、高所を恐れる人は、ハンググライダーの空力特性や安全性をいくら正しく説明されたところで、そんなもので空に舞い上がろうなどとは露も思わない。頑丈な鉄筋コンクリート建の高層階の窓から外を覗くのでさえ恐怖なのである。「無理解」と「恐怖」は、必ずしもいつも結びついているわけではない。だとすれば、「〇〇恐怖症」は、そもそも「誤って恐

れている」わけではない。この人たちに「正しく恐れましょう」というのは、暴力である。かくして、新型コロナウイルスを「正しく恐れる」ことができる人は、よほど鈍感な一部の人しかいないことになる。大多数の人々にとつて、この標語は、単なる「音」とか「字面」らしいとはわかるが、高次の脳機能として理解不能である。「雑音」とか「赤ん坊の殴り書き」のレベルでしかない。これを理解しようと頑張ると、脳は破綻する。

「感染リスクを回避できない場合」も道民にはおなじみの表現である。「リスク」は、危険なことが起こる可能性である。可能性である以上、未来を予測できない我々人間には避けることができない。英英辞典を眺めたら「スキーヤーは、深刻な怪我のリスクに常にさらされている」という用例を見つけた。リスクは、避けられないことを表す言葉である。感染（リスク）は回避できない。回避できるならそれはリスクではない。知事の発言はこのあとに「不要不急の外出（往来）を控えてほしい」と続く。「感染リスクの回避」は絶対不可能だから、一切「不要不急の外出（往来）」はするな」と言っているに過ぎない。余計な修飾語を入れて混乱させる必要はない。もちろん「不要不急」とは何かの問題はある。人によって不要不急の判断基準は異なる。知事の発言は、つまり「まあ適当に判断してね」と言っているに過ぎない。「気のゆるみ」もよく言われているコトバで

ある。気がゆるんだから感染が拡大したと専門家、それも現場の医療に携わっているとは思えない（専門家）が発言している。道内各地で頻発した病院などでの感染は、当該病院内の医師や看護師が「気がゆるんだから」発生したのだと言わんばかりである。「気のゆるみ」は、専門家の発言とは思えない噴飯ものである。

感染症の蔓延を防ぐ方法は、専門家でもわからない簡単なものである。他人と一切接触しないことである。八割の人が外出を控えて他人と接触しなければ感染が沈静化することは、素人でもわかる。自動車交通事故をなくすために「自動車を使うのをやめましょう」と道路交通などの専門家が発言するのを寡聞にして存じ上げない。危険を承知した上で、自動車を活用しつつ事故をいかに減少させるかに、自動車設計者、道路設計者たちは日々努力しているのではないかと。

「感染経路不明のほとんどは飲食店（が原因）」も意味不明の発言である。原因がわかっているなら、なぜ「経路不明」なのか。こうしたコトバの使用は、自己満足と責任逃れに過ぎない。新型コロナウイルスの本意は、肺炎やサイトカイン・ストームではなく、人類の思考力破壊なのではないかとさえ思えてくる。

紙幅がないのでこの辺でやめておく。ともかく、これらの意味不明のコトバの反乱が、私の拙い脳はついていけない。配線が混乱する。これを吐き出さないと、原稿など書けないのである。

当研究所が掲げる「自治」とは無関係な言辭となつてしまった。脳内混乱をなんとかリフレッシュさせてくれるのは、宇野重規「民主主義とは何か」、吉田徹「アフター・リベラル」などの良書である。

へさとう かつひろ・北海道大学教授／当研究所理事長